２０２３年１２月０７日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ３０頁

小金井桜 子規を魅了

文人の武蔵野

並木仙太郎 ④

19世紀から20世紀にかけての日本において、小金井は、広くその名を知られる名所でした。当時の東京の名所案内に小金井が入っていたことは、武蔵国と江戸のことから説き起こし、江戸城から日本橋のあたりを起点にして周縁に筆を広げていく「江戸名所図会」（1834年・1836年）の中に「小金井」が含まれていることからもわかります。

小金井を表象するのは、桜花とともに描かれた「小金井橋春景」や「小金井橋」の挿絵でした。「小金井橋」の挿絵には、「岸を夾む桜花は数千株の梢を並べ落英繽紛たり。開花の時、此橋上より眺望すれば雪とちり雲とまがいて一目千里前後盡る際をしらず。仍て都下の騒人遠を厭ずしてここに遊賞するもの少なからず。橋頭酒を煖め茶を煮るの両三店あり。遊人或は憩い或は宿す」と記されています。

小金井橋近くには、古い橋の一部が保存されている（小金井市で）

1883年（明治16年）6月に愛媛県の松山から上京した正岡子規は、小金井を訪ね、その2年後の4月25日に小金井で花見をしています。

1900年（明治33年）には、「玉川の流れを引ける小金井の桜の花は葉ながら咲けり」と詠みました。万葉集の時代より武蔵野の象徴である玉川と、都で話題の小金井桜を結びつけ、小金井桜が「葉」のある山桜であることを謳歌しています。

子規は、大学を中退して根岸の子規庵に寄宿していた高浜虚子にも小金井桜を見に行くことを勧めました。そこは後に、並木仙太郎が武蔵野の中の武蔵野と認める場所でした。

「小金井橋」の挿絵にある文言を参照するなら、正岡子規もまた「都下の騒人」（東京に居る文人）が「遠を厭ずして」足を運び、「遊人」となったひとりだったと言えるでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。